

ウィトゲンシュタインとキェルケゴール

— 研究のための資料 —

鈴木 祐 丞

序

ウィトゲンシュタイン (1889-1951) とキェルケゴール (1813-1855) の相関をめぐって、これまで多くの研究がなされてきた。クリーガン (Charles L. Creegan) によるパイオニア的な研究 (Creegan) に端を発し、コナント (James Conant) などにより主要な論点が形作られ (Conant)、その論点などを巡って数多くの考察がなされてきている¹。両者の相関をめぐる研究に一つの大きな転換点をもたらすことになった (あるいはなりつつある) のが、以前にはその存在が知られていなかったウィトゲンシュタインの遺稿 (MS183²) の発見と出版である。その遺稿は、ウィトゲンシュタインの死後四十年以上を経て研究者の手に渡り³、1997年に原語のドイツ語で出版⁴されたのを皮切りに、その後各国語に翻訳されてきている。2003年には英語で⁵、その後2005年に『哲学宗教日記』と題され日本語で出版された⁶。MS183の発見と出版が、ウィトゲンシュタインとキェルケゴールの相関をめぐる研究において、どのような意味で大きな転換点を画すこととなった (なりつつある) のかということ、MS183を手掛かりにして、キェルケゴールがウィトゲンシュタインに実際にどのように影響を与えたのかを、言い換えればウィトゲンシュタインがキェルケゴールの書いたものを実際にどのように読んだのかを、以前とは比較にならないほどの実証性をもって、特定することができるようになったのである。もちろん MS183の発見と出版以前にも、このことを可能にする資料は存在していたのだが、質・量ともに非常に限定的であったと思われる⁷。必然的に、MS183以前の両哲

学者の相関をめぐる研究は、両者の思想的類似点を探ることを主な主題とし、そのようなものとしての意義はもちろん有するものの、両者の実際の関係を特定することを主要な関心とはしていなかったと思われる。ウィトゲンシュタインは、MS183においてこそ、「キェルケゴール」の名にもっとも数多く言及している (本稿下記参照) のであって、MS183の出版によって、両者の実際の関係を実証的に特定する道が研究者の前に大きくひらけたと言ってよい⁸。その道は、キェルケゴールの思想が有する現代的意義の一端に光を当てることにもつながることだろう。

このような状況を念頭に、本稿では、研究の進展への一寄与として、ウィトゲンシュタインとキェルケゴールの関係についての研究のための資料を作成し、提示したい。以下では、キェルケゴールが書き残したもの (著作、日記、遺稿) のうちウィトゲンシュタインが読むことが可能であったものは何であったか、それらのうちウィトゲンシュタインは実際にどれを読んだ (所有していた) 可能性があるかを示し、また、ウィトゲンシュタインによる「キェルケゴール」の名への言及を蒐集したい。最後に、両者の関係についての研究に資すると思われる、その他の雑多な資料をまとめておきたい。

1 ウィトゲンシュタインが読むことが可能であったキェルケゴールの著作、日記、遺稿

まず、そもそもウィトゲンシュタインはキェルケゴールの筆によるもののうち何を読むことが可能だったのか、確認することから始めたい。

キェルケゴールは19世紀のデンマークを生き、

彼が書き残したもの（著作、日記、遺稿）はすべてデンマーク語で叙述されている。ウィトゲンシュタインは主に20世紀のオーストリアとイギリスを生き、母語であるドイツ語の他に、英語が読解可能であった。また、ウィトゲンシュタインが、ケルケゴールを原典で読むためにデンマーク語の勉強をしていたこと⁹、ケルケゴールの著作のラウリー（Walter Lowrie）による英語訳が原典の優美さを損ねてしまっている旨述べたこと¹⁰が伝えられていることから、ウィトゲンシュタインはデンマーク語をある程度は読解できたものと推測できる。

ウィトゲンシュタインは少なくともドイツ語・英語・デンマーク語を読解可能であったと想定して、以下では、ウィトゲンシュタインの存命中にすでに出版がなされていた、ケルケゴールの原典（デンマーク語）の著作、日記、遺稿にはどのようなものがあったか、ドイツ語訳のそれらにはどのようなものがあったか、英語訳のそれらにはどのようなものがあったか、順に確認していきたい。つまるところ、少なくとも以下に列挙されるものを、ウィトゲンシュタインは読むことが可能だったということである。

(1) 原典（デンマーク語）¹¹

1855年のケルケゴールの死後、彼の書き残したものの大部は、原典（デンマーク語）では、著作群と日記・遺稿群という二つの系列に分けられて、それぞれの系列で出版が進められた。

まず著作群について言えば、1901年から1906年にかけて、『原典全集』第一版（SV1）¹²が計十四巻で出版された。1920年から1936年にかけて計十五巻の『原典全集』第二版（SV2）¹³が出版されたが、これは、第一版の編集をほぼそのまま踏襲しつつ、新たに用語解説・インデックスを第十五巻として付したものである。

日記・遺稿群については、1869年から1881年にかけて、計九巻の『日記・遺稿集』初版（EP）¹⁴が出版された。1909年から1948年にかけては、計十一巻の『日記・遺稿集』第二版（Pap.）¹⁵が出版された。

これら著作群および日記・遺稿群の他に、ケルケゴールの『新聞論文集』（Bl. art.）¹⁶が

1857年に出版されている。

これらの出版物によって、ケルケゴールの書き残したもののほぼすべてがカバーされている¹⁷。

(2) ドイツ語訳¹⁸

ケルケゴールの著作の代表的なもの、遺稿の一部が、1909年から1922年にかけて出版されたドイツ語訳ケルケゴール全集の第一版に収録されている¹⁹。そこには、『あれか、これか』、『おそれとおののき』、『反復』、『人生行路の諸段階』、『不安の概念』、『哲学的断片』、『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』（以下『非学問的あとがき』と略記）、『死に至る病』、『キリスト教の修練』、『わが著作活動の視点』、『二つの建徳的講話（1843年）』、『わが著作家活動について』、『自己吟味のために』、および『瞬間』が収められている。

ケルケゴールの日記に関しては、ヘッカー（Theodor Haecker）が、日記全体から項目を取捨選択し、1923年にドイツ語訳（計二巻）を出版している²⁰。

これら二つの出版物が、ウィトゲンシュタインの生前に刊行された、ケルケゴールの著作、日記、遺稿のドイツ語訳の代表的なものである。これらに収録されなかったケルケゴールの著作、日記、遺稿であっても、その多くが、すでにウィトゲンシュタインの存命中に、様々な翻訳者の手によりドイツ語訳されている²¹。シュルツ（Heiko Schulz）の言葉を借りれば、「すでに1915年ころには、ケルケゴールのかなり多くの作品がドイツ語に翻訳され、流通していた」ということである²²。

(3) 英語訳

ケルケゴールの著作の多くと遺稿の一部が、ウィトゲンシュタインの生前、主にスウェンソン（David F. Swenson）とラウリー（Walter Lowrie）の手により英語訳されていた²³。主要な作品の出版の年を確認してみると、『哲学的断片』（1936年）、『キリスト教講話』（1939年）、『野の百合と空の鳥』（同）、『わが著作活動の視

点』(同)、『おそれとおののき』(同)、『キリスト教の修練』(1940年)、『自らを裁け』(同)、『人生行路の諸段階』(同)、『非学問的あとがき』(1941年)、『あれか、これか』(1941・44年)、『反復』(1941年)、『死に至る病』(同)、『不安の概念』(1944年)、『愛のわざ』(1946年)などとなっている。これらの作品以外にも、様々な宗教的講話の英語訳も、このころまでにほぼ出そろっている。

日記に関しては、上述のヘッカーのドイツ語訳に(収録する項目の取舍選択という点で)準拠した英語訳が、ドゥル(Alexander Dru)の手により1938年に刊行されている²⁴。

2 ケルケゴールが書き残したもののうち、ウィトゲンシュタインが読んだ(所有していた)可能性のあるもの²⁵

ウィトゲンシュタインが読むことが可能だったケルケゴールの著作、日記、遺稿は、上に列挙した通りである。これらのうち、ウィトゲンシュタインが実際に読んだ、あるいは少なくとも所有していた可能性のあるものを、その根拠とともに、以下に並べてみたい²⁶。

(1) 『あれか、これか』

ウィトゲンシュタインの姉ヘルミーネがウィトゲンシュタインに宛てた1917年11月20日付の手紙に、次のような記述がある。

11月13日付のかわいらしいカードをどうもありがとう。あなたの想像の通り、欲しい本のリストを書いたというあなたの手紙を、私は受け取っていません。ですが……たくさんのケルケゴールの本を、今郵送してあります。あなたが欲しがっている本だといいいのだけれど。なぜなら、私にはケルケゴールや彼の作品のことはさっぱり分からないので、ただランダムにいくつか選んだのです。『誘惑者の日記』[『あれか、これか』の一部]という本を、また別の書店で買いました。それも送っておきました²⁷。

ウィトゲンシュタインの「宗教的信念についての講義」(1938年夏に彼がケンブリッジで行った講義を、受講生がノートに書きとめたもの)の中に次のような言葉がある。

ある偉大な作家は、自分が少年だった頃、父親がある仕事を自分に課したのだが、自分は突然何ものも、死でさえも、その[仕事をするという]責任を取り上げることができない、それは自分のなすべき義務であり、死でさえもそれを自分の義務とすることを止めさせられないと感じた、と言っている。かれは、これこそあるいみで靈魂の不滅の証明である——なぜなら、靈魂が生き続けるなら[その責任は死なないからである]——と言った²⁸。

これは、クリーガンが指摘するように²⁹、ケルケゴールの『あれか、これか』の「人格形成における美学的なもの倫理的なものとの均衡」の一節への言及である可能性があり、「ある偉大な作家」はケルケゴールを指す可能性がある。ケルケゴールは、その箇所で、「倫理的なものにおいては義務の多様性が問題なのではなくして、義務の強度が問題である」ということを具体例(父親が子どもに「学校のことを気にかける」という義務を課すこと)を通じて示そうとし、「つまり、私が私を倫理的に意識するそのエネルギーこそが肝心な点なのだ、あるいはむしろ、エネルギーを伴わずしては、私は私を倫理的に意識することができないのだ。それゆえ私は、私の永遠の存在を意識せずに、私を倫理的に意識することはまったくできないのだ。このことが魂の不滅性の真の証明なのだ」と述べるに至っている³⁰。

(2) 『おそれとおののき』

ウィトゲンシュタインは、1922年1月13日付の手記³¹に、次のように記している。

今日の夜、私は自分がまったくの無であることを感じ取った。神がそのことを教え

てくださった。そのとき私はずっとケルケゴールのことを考えていた。そして私のこの状態が「おそれとおののき」なのだと思った³²。

(3) 『不安の概念』

ウィトゲンシュタインがトラッテンバッハで教師をしていた際の生徒の一人グルーバー (Karl Gruber) が、ウィトゲンシュタインの部屋でケルケゴールのものと思われる「変わったタイトルの」本を見たこと、そしてそのうちの一つに「不安」という語が含まれていたことを記憶している³³。ウィトゲンシュタインがグルーバーと出会ったのは1921年夏のことと考えられ、またウィトゲンシュタインがトラッテンバッハを去ったのは1922年10月のことであるので³⁴、これはそのあいだのことと考えられる。

(4) 『哲学的断片』

ウィトゲンシュタインは、1929年12月30日、ヴァイスマン (Friedrich Waismann) との会話の中で、「我々は言語の限界へと向かって突き進む。ケルケゴールもまた、この衝動を分かっている、実に同じ仕方で (逆説への衝動として) それを描写しさえした」と述べている³⁵。

また、1937年4月19日の手稿には、「『信じる』という言葉によって恐ろしいほどたくさんの災いが宗教に引き起こされた」と私は信じる。歴史的事実の永遠の意味という『パラドックス』やそれに類することに関するあらゆる込み入った思考がそうだと書かれている³⁶。

さらに、1946年10月11日の手稿の中で、ウィトゲンシュタインは、「知恵には情熱はない。それにたいしてケルケゴールは、信仰を情熱と呼んでいる」と書いている³⁷。

これらの言葉は、内容的に、ケルケゴールの『哲学的断片』への言及である可能性がある。

(5) 『非学問的あとがき』

ウィトゲンシュタインの友人の一人ドゥルリー (Maurice O' Connor Drury) は、ウィ

トゲンシュタインが、1936年に、ケルケゴールが『非学問的あとがき』において引用しているレッシングの言葉 (「神もしその右手に一切の真理を保ち、しかしてその左手には真理を追い求めるたゆまざる欲求をば——ただし常時かつ永劫に迷いの道を歩むべしとの付帯条件をつけて——握って、われにむかって《選べ》と告げたもうたとするならば、われはうやうやしく神の左手にむかってぬかずき、かく願いまつるであろう。《父よ、これをば与えたまえ。混りなき真理そのものは、ひとりなんじにのみふさわしきものなれば!》」³⁸) を、彼に向けて語ったことを覚えている³⁹。

ドゥルリーはまた、ウィトゲンシュタインが、おそらく上記と同じころ、ケルケゴールが『非学問的あとがき』において展開させる「実存の三段階」という考え方に言及し、次のように語ったことを記憶している。

この最後のカテゴリー [宗教的実存] について言えば、率直に言って私にはどうやったらそれが可能になるのか分からない。私はどのようなものであっても断念できたためしはない。欲しいと思うならばコーヒーの一杯であっても。ケルケゴールが信じていたことを、私は信じていないということではある。だがこのことから、私たちは満ち足りた時を送るためにここにいるのではないのだということ、このことを私は確信する⁴⁰。

同じく友人の一人マルコム (Norman Malcolm) は、ウィトゲンシュタインについて回想し、次のように記している。

彼 [ウィトゲンシュタイン] は、またケルケゴールを高く評価していた。「本当に宗教的な人だ」と言った風な表現を使って、何か畏敬の念をこめてケルケゴールについて語っていた。その『非学問的あとがき』も読んでいたが、自分には深遠すぎてわからないと思ったらしい⁴¹。

マルコムがウィトゲンシュタインにはじめて

会ったのは1938年秋のことであるので⁴²、ウィトゲンシュタインの上記の語りは、それ以降になされたものと考えられる。

(6) 『キリスト教の修練』

ウィトゲンシュタインの友人の一人ヘンゼル(Ludwig Hänsel)が1921年10月14日付でウィトゲンシュタインに送った手紙の中に、ヘンゼルがウィトゲンシュタインにケルケゴールの『キリスト教の修練』を送ろうとしているがすぐにはそうできそうにないという報告と、同書を書店に注文しようかという問い合わせが書かれている⁴³。

1937年3月15日ころのウィトゲンシュタインの手稿には次のようにある。

自分自身を認識するというのは恐ろしいことである、というも人は同時に生きた要求を認識し、自分がそれに及ばないことを認識するからだ。だが自分自身を知ろうとするなら、完全な者を見ることほど良い方法はない。それだからこそ、完全な者は完全にへりくだろうとはしない人間のうちに、憤慨の嵐を呼び起こさざるを得ないのである。「幸いだ、私を腹立たしく思わないものは[わたしにつまずかない人は幸いである]」⁴⁴という言葉が意味するのは、完全な者を見ることに耐えられるものは幸いだ、ということである⁴⁵。

ケルケゴールが『キリスト教の修練』で主題的に描き出しているのは、理想的キリスト者像であり、また人間がそれと向き合うときに経験する「躓き」である。そして、「マタイによる福音書」11.6の一節「わたしにつまずかない人は幸いである」は、『キリスト教の修練』第二部においてケルケゴールが主題的に扱い表題として掲げる言葉である。ウィトゲンシュタインは1937年のこの時期にケルケゴールを集中的に読んでいた(本稿第3章参照)ことから、ウィトゲンシュタインの上記の引用は、ケルケゴールが『キリスト教の修練』において掲げている言葉であると考えられる⁴⁶。

(7) 日記

ウィトゲンシュタインは1946年から47年にかけて、ケンブリッジで、通常の週に二回の講義の他に、土曜日の17時から19時に自宅でディスカッションを開催していた。出席者の一人エドワーズ(Gilbert H. Edward)がとった、おそらく1947年2月22日のディスカッションのノートに次のようにある。

ケルケゴールは、神の存在について彼が知る最善の証拠は、彼の父親が彼にそう言ったからだ、という趣旨のことを述べている。さて、ケルケゴールはとくに彼の父親が優れた人物だったということを強調したいわけではなかったことは明白であろう。とすると彼は何を言わんとしているのか? ここから何が帰結するのか? 彼は、人間性についての一般的で伝統的な信念、ほとんどの人間がそれを実際に信じている事実を指摘しているように思われる。もし我々の父親が我々に[神の存在について何も]言わなかったならば、その時我々は[そのことを]知らないであろう。だがそれを言ったときには、その考えはすぐに受け入れられるのである⁴⁷。

ウィトゲンシュタインはここで、下に引用するケルケゴールの1848年の日記の一節に言及している可能性がある。

魂の不死性、神の現存などについての最善の証拠は、実際のところ、こうしたことについて我々が子どものころに持つ印象なのである。だから、その証拠は、数多の学問的で仰々しいものとは異なって、次のように表現されることであろう。「それはまったく確実だ。なぜなら、それは父が私に言ったことなのだから」⁴⁸。

ウィトゲンシュタインが利用可能であったケルケゴールの日記のドイツ語訳(上記ヘッカーによる版)には、実際にこの項目が収録されて

いる⁴⁹。

(8) 『火口』(Der Brenner) に収録された諸作品

ウィトゲンシュタインは1914年にオーストリアの文芸誌『火口』の編集者フィッカー(Ludwig von Ficker)を通じてオーストリアの芸術家たちに多額の寄付をした。おそらくその関係で、ウィトゲンシュタインは少なくとも1921年8月までは、フィッカーから『火口』を受け取り続けていたようである。エンゲルマンに送られたウィトゲンシュタインからの手紙(1921年8月5日付)がこのことを物語っている。

フィッカーは私に『火口』を送り続けている。そして私は彼にそれを止めるように手紙を書こうと思いつけている。それというのも、『火口』はナンセンスだ(キリスト教的雑誌というものは知的な偽りだ)と信じているからだ——だが私はフィッカーにそうした手紙を送ろうとしてみたためしがない。長々とした説明を書くだけの平穏や静けさを見出すことができないからだ⁵⁰。

このことから、ウィトゲンシュタインは『火口』に収録された、ケルケゴールの諸作品(ヘッカーによるドイツ語訳)⁵¹を(読んだかどうかは定かでないものの少なくとも)所有していたと考えられる⁵²。

3 ウィトゲンシュタインによる「ケルケゴール」の名への言及

次に、ウィトゲンシュタインが「ケルケゴール」の名に言及している箇所、より正確に言えばウィトゲンシュタイン自身が「ケルケゴール」の名を書いている箇所を、(本稿ここまでの内容と一部重複するが)蒐集しておきたい⁵³。

(1) 1922年1月13日付の手記

今日の夜、私は自分がまったくの無であ

ることを感じ取った。神がそのことを教えてくださった。そのとき私はずっとケルケゴールのことを考えていた。そして私のこの状態が「おそれとおののき」なのだと考えた⁵⁴。

(2) 1931年2月22日の手稿

ハーマンやケルケゴールといった書き手とのつきあいは編集者を思い上らせる。[アンゲルス・シレジウスの]『ケルビムのさすらい人』の編集者は決してそうした誘惑を感じないだろう、ましてやアウグスティヌスの『告白』やルターの著作の編集者ならなおさらである。

多分書き手のアイロニーが読者を思い上げがちになる、ということだろう⁵⁵。

(3) 1931年5月6日の手稿

ケルケゴールへ、私があなたに一つの生き方を描くから、あなたがそれとどう関係しているかを見てください、そのように生きることがなほあなたを惹きつける(そのように生きようせきたてる)かどうか、あるいはそれに対して自分が他のどんな関係を持つのか、を見てください。この描写を通じて私は、いわば、あなたの生き方を和らげたいのだ⁵⁶。

(4) 1931年10月13日の手稿

私が、いわば、魂の中の劇場で(ケルケゴール)演じていることは、魂の状態をより美しくするのではなく、(むしろ)より忌むべきものにする。それなのに私は繰り返し何度も、舞台の美しい場面を通じて魂の状態をより美しくしているのだと信じてしまう⁵⁷。

(5) 1931年11月7日の手稿

ケルケゴールの著作には人をからかうものがある。そしてもちろんそれは意図的

なものである。私に対して彼の著作が及ばず影響そのものが意図されたものかどうかは私には定かでないが。そして私をからかうものが、彼の問題に取り組むことを私に強いること、そしてその問題が重要であれば、これがいいことであることに何の疑問もない。——それにもかかわらず私の中には、このからかいを非難する何かが存在する。それは単に私のルサンチマンにすぎないのか。もちろん私はケルケゴールが彼の著作で美的なものの不条理さをその名人芸で示していること、そしてもちろんそれを彼が意図して行っていることを知っている。しかし彼の美学的著作には、言ってみればすでにかすかな苦みが含まれており、まさにそれ自身において詩人の作品とは違った味わいを持っている、というのも事実である。彼は詩人ではないのに、いわば信じられないような名人芸で詩人をまねているのだが、人はその模倣の中に、彼が詩人でないことに気づくのである⁵⁸。

(6) 1932年1月11日の手稿

生まれてから死ぬまでずっと眠っているか、ある種の浅い眠りや夢うつつの中で生きている人間を想像することができる。本当に生き生きとした人間（ほかならぬケルケゴールのことを私は考えている）に比べると、私の生とはそんなものだ⁵⁹。

(7) 1937年2月13日の手稿

良心に苦しめられ、そのため仕事ができない。ケルケゴールの著作を読んで、これまでもそうだったが、いっそう不安になった。私は苦しもうとしない。このことが私を不安にさせる。どんな便利さも、どんな楽しみも、私は断念しようとする⁶⁰。

(8) 1937年2月18日の手稿

自分にとって謙虚であることほど難しいことはない。ケルケゴールを読んでいる

ので、このことに今再び気づく。自分が負けたと感ずることほど私にとってつらいことはない。問題になっているのが、ただ真実をありのままに見ることに過ぎないのに、そうなのである⁶¹。

(9) 1937年2月24日の手稿

《自分が（卑劣な）利己主義者でない場合にのみ、私は穏やかな死を望むことができる。

純粹な者は耐え難い厳しさを持っている。ドストエフスキーのような者の訓戒がケルケゴールのような者の訓戒よりやさしく感じられるのはこのためである。一方がまだ押し絞っているとき、他方はすでに切り落としているのである⁶²。

(10) 1937年3月6日の手稿

他のことについては多くの優れた意見を持っているシュペングラーが、ケルケゴールの評価については大きく誤っているというのは興味深いことである。ここには彼にとって偉大すぎる人間が、あまりにも近くに立っているのだ。彼はただ「巨人の長靴」を見ているに過ぎない⁶³。

(11) 1937年10月22日の手稿

「もしもキリスト教がわかりやすくて気持ちのいいものであるのなら、どうして神は聖書のなかで、天地を動かし、永劫の罰をちらつかせて脅かしたのだろうか」と、ケルケゴールが書いている。——ここで質問。「ではなぜ、聖書はそんなにあいまいなのか。もしも恐ろしい危険を警告するつもりなら、謎を出したりするだろうか。その答えが警告となるような謎を。……大切なこと、君の人生にとって大切なことは、精神・霊が、聖書の言葉に吹きこんでいる。君はただ、聖書の記述によってはっきり示されているものを、はっきり見るだけでいいのだ。（ここに書いたことが、どれくら

い精確にキェルケゴールの精神に即しているのか、私にはわからない。) ⁶⁴。

4 その他の資料

(12) 1940年1月10日の手稿

おなじような意味で、私が建てたグレートルの家は、断固たる耳ざとさの、行儀よさの結果であり、(ひとつの文化などにたいする)偉大な理解の表現である。だがそこには、存分に荒れ狂いたい根源的な生命が、野生の生命が——かけている。したがってこうも言えるだろう。そこには、健康が欠けている(キェルケゴール)。(温室植物⁶⁵)⁶⁶

(13) 1946年10月11日の手稿

キリスト教は、なによりも次のように教えているのではないか。どんなにすぐれた教義もなんの役にも立たない。生活を変えるしかないのだ。(あるいは、生活の方向を変えるしかないのだ。)

どんな知恵も冷たい。冷えた鉄を鍛えることができないように、知恵によって、生活をきちんとさせることはできない。

すぐれた教義は、われわれを感動させる必要がないからである。医者⁶⁷の指示に従うように、従えばよいのである。——だがこの点において、われわれは、なにかに感動させられ、方向転換させられる必要がある。……方向転換したなら、もう方向を変更してはならない。

知恵には情熱はない。それにたいしてキェルケゴールは、信仰を情熱と呼んでいる⁶⁷。

(14) 1948年2月5日付のマルコムへの手紙

キェルケゴールの『愛のわざ』はまだ読んでいたことがありません。どうもキェルケゴールは私には深遠すぎるのです。私よりも深い心の持ち主であればよい効果をもたらされるのでしようが、私の場合はただ当惑させられるばかりなのです⁶⁸。

最後に、ウィトゲンシュタインとキェルケゴールの相関についての研究に資すると考えられる、その他の雑多な資料を(本稿ここまでの内容と一部重複するが)まとめておきたい。

(1) ヘンゼルの日記(1919年4月から11月)

第一次大戦後カッシーノの捕虜収容所でウィトゲンシュタインと知り合いになった教師ヘンゼル(Ludwig Hänsel)が、収容所生活のさなかに書いた日記⁶⁹の中の、1919年4月23日から5月4日の記述に、次のようにある。

キェルケゴール、死に至る病。自分で作り上げた、自己についての見解を、ふたたび見つけ出せ。そしてそれを喜びとしよう。だが鋭い弁証法の冷や水を浴びせられる(ヘーゲル?)。だが諸々の絶望から引き出されるこうしたすべての深淵の予感による驚き。……いったい私はどんな絶望をしているのか? 偏狭さ? 弱さ? 弱さの意識?

昨夜のウィトゲンシュタインとの議論。それがその本と私とのきわめて居心地のいい関係をとがめる。……彼は悟性の世界と神の世界のあいだに、どんな架け橋も持たないのだ⁷⁰。

ヘンゼルは、1919年11月6日の日記に、キェルケゴールの「現代の批判」についての所感を述べつつ、自分はいまだ教会という文化を必要としている一方、ウィトゲンシュタインはキェルケゴールの精神と近いということ(「……孤立のキリスト教。ウィトゲンシュタイン——「ただキリスト教のみが、いつでも現代的だ」」)を記している⁷¹。

(2) ラッセル (Bertrand Russell) からオトリオン夫人 (Lady Ottoline) への手紙 (1919年12月20日付)

以前にも私 [ラッセル] は彼 [ウィトゲンシュタイン] の本の中に神秘主義的なものを感じ取っていました。しかし、私が驚いたのは、彼が完全な神秘主義者になったのを知ったときでした。彼はキェルケゴールやアンゲルス・シレジウスといった人の本を読んでいて、僧侶になることについて真剣に考えています⁷²。

(3) ヴァイスマンの回想 (1929年12月の会話)

[ウィトゲンシュタインは次のように言った。] 我々は言語の限界へと向かって突き進む。キェルケゴールもまた、この衝動を分かっている、実に同じ仕方で (逆説への衝動として) それを描写しさえした⁷³。

(4) リー (H. D. P. Lee) の回想 (1929年から1931年ころの会話)

彼 [ウィトゲンシュタイン] は私に、原典でキェルケゴールを読むようにデンマーク語を学習している、と言った。彼がキェルケゴールについて詳しいことを語っていた記憶はないが、それでも間違いなくキェルケゴールに対する大きな崇敬の念を抱いていた⁷⁴。

(5) マルコム of 回想 (1938年秋以降の会話⁷⁵)

いちど私 [マルコム] がキェルケゴールの「キリストが私を救ったことを私自身が知っているのに、キリストが存在しなかったとどうして考えられようか」といった意味の言葉を引いたとき、ウィトゲンシュタインは「それ見たまえ。それは何かを証明するという次元の問題じゃないんだ！」と大声で言ったことがある。……彼は、またキェルケゴールを高く評価していた。「本当に宗教的な人だ」と言った風な表現を使っ

て、何か畏敬の念をこめてキェルケゴールについて語っていた。その『非学問的あとがき』も読んでいたが、自分には深遠すぎてわからないと思ったらしい⁷⁶。

(6) ドゥルーリーの回想 (1930年代から1951年ころまでの会話)⁷⁷

ウィトゲンシュタインは、ケンブリッジのモラル・サイエンス・クラブのミーティングでキェルケゴールの名前に言及した。ドゥルーリーが後日そのことに関連してウィトゲンシュタインに質問をすると、ウィトゲンシュタインは、「キェルケゴールは前世紀のずば抜けて深遠な思想家だ。彼は聖人だ」と返答した。

ウィトゲンシュタインは、この言葉に続けて、キェルケゴールの「実存の三段階」の考え方に言及し、次のように語った。

この最後のカテゴリー [宗教的実存] について言えば、率直に言って私にはどうやらそれが可能になるのか分からない。私はどのようなものであっても断念できたためしはない。欲しいと思うならばコーヒーの一杯であっても。キェルケゴールが信じていたことを、私は信じていないということではある。だがこのことから、私たちは満ち足りた時を送るためにここにいるのではないのだということ、このことを私は確信する。

数年後、キェルケゴールの著作がラウリーによって英訳されたとき⁷⁸、ウィトゲンシュタインはその英訳に不満であった。ラウリーは原語であるデンマーク語のエレガンスを再創造しそこねている、と。

ウィトゲンシュタインは、彼の学生の一人がローマ・カトリックになったことについて、彼がその学生にキェルケゴールを読むことを薦めたので、そのことに責任を感じていると言った。

ウィトゲンシュタインの晩年に、ドゥルーリーは彼とキェルケゴールについて次のような会話を交わした。

[ドゥルレー:] 私には、ケルケゴールはいつも人々に新しいカテゴリーについて気づかせようとしているように思える。

[ウィトゲンシュタイン:] その通り。それこそがまさにケルケゴールのしていることだ。彼は新しいカテゴリーを導入しているのだ。今では私は彼をまた読むことはできない。彼はあまりにも冗長で、同じことを何度も何度も言い続けるのだ。彼の本を読むとき、いつも「はいはい。分かった分かった。ともかく先に進めてくれ」と言いたくなかったものだ。

(7) ブーズマ (Oets K. Bouwsma) の回想 (1949年11月の会話)

彼 [ウィトゲンシュタイン] は私に、ケルケゴールを読んだことはあるか、とたずねた。私は読んだことがあった。彼もいくらか読んでいた。ケルケゴールはとても真剣だ。だが彼はケルケゴールをそれほど読むことができなかった。彼はヒントを得た。彼は他の人の思考をじっくりと考えることを嫌った。一語や二語で、時には十分だった。だがケルケゴールはウィトゲンシュタインのことを、ほとんど彼が俗物であるかのように、打ちのめしたのだった。彼にとってはあまりにも高く、通常の生活の細かなことに触れることがなかった⁷⁹。

註

- ¹ 両者の相関をめぐる研究史については、Rudd や Miles など参照のこと。
- ² このナンバリングは、ウィトゲンシュタインの遺稿管理人フォン・ライト (G. H. von Wright) により付されたウィトゲンシュタインの遺稿目録における番号であり、「MS 183」は、ウィトゲンシュタインの手稿 (MS) の183番目の項目を意味する。ウィトゲンシュタインの遺稿について、詳細は、フォン・ライト335-374頁参照。
- ³ この日記の発見と刊行の経緯については、ウィトゲンシュタイン『哲学宗教日記』5-

10頁参照。

- ⁴ Wittgenstein *Denkbewegungen*.
- ⁵ Wittgenstein *Public and Private Occasions*.
- ⁶ ウィトゲンシュタイン『哲学宗教日記』。
- ⁷ ウィトゲンシュタインの遺稿の全体 (2000年に CD-ROM『ベルゲン電子版遺稿全集』(Wittgenstein's Nachlass: The Bergen Electronic Edition) が発売されたことで、一般読者も接することが可能となった)のうち、「かれの哲学的仕事に直接属するものではなく、芸術や宗教や歴史哲学や価値の問題や処世術といった『一般的主題』にかかわる覚書」(フォン・ライト367頁)は、フォン・ライトによって一冊の本として編集され、1977年にまずドイツ語で出版された (Wittgenstein *Vermischte Bemerkungen*)。同書はその三年後に英語訳され (Wittgenstein *Culture and Value*)、1999年には邦訳もされた (ウィトゲンシュタイン『反哲学的断章』)。ウィトゲンシュタインとケルケゴールの相関についての研究に資する、MS183以前に入手可能な資料は、おもにこの書であった。なお、それを資料として特定しうるウィトゲンシュタインのケルケゴールへの関係の一つとしては、ケルケゴールの「情熱」としての信仰観をウィトゲンシュタインも共有していた (ウィトゲンシュタイン『反哲学的断章』152頁参照) という点が挙げられると思われる。
- ⁸ MS183を資料としてウィトゲンシュタインとケルケゴールの関係を考察する研究が、実際に出始めている。例えばロー・フレムステダルのもの (Fremstedal) が挙げられる。また、拙著 (Suzuki および鈴木祐丞「ウィトゲンシュタインのケルケゴール体験」) もその例である。
- ⁹ Lee p. 218.
- ¹⁰ Drury 'Some Notes on Conversations with Wittgenstein' p. 103.
- ¹¹ ケルケゴールの著作、日記、遺稿のデンマーク語での出版史の詳細は、鈴木祐丞「新版原典全集 (SKS) の特徴と意義について」参照。

- ¹² Kierkegaard *Samlede Værker* (1901-06).
- ¹³ Kierkegaard *Samlede Værker* (1920-36).
- ¹⁴ Kierkegaard *Efterladte Papirer*.
- ¹⁵ Kierkegaard *Søren Kierkegaards Papirer*.
- ¹⁶ Kierkegaard *Kierkegaards Bladartikler*.
- ¹⁷ ウィトゲンシュタインの死後、1953年から1954年にかけて、ケルケゴールの『手紙と資料文書』(Kierkegaard *Breve og Aktstykker*) がデンマーク語で刊行されている。これが、ケルケゴールが書き残したもののうち、ウィトゲンシュタインが実質的に利用不可能であったと考えられる資料となる。
- ¹⁸ ケルケゴールの著作、日記、遺稿のドイツ語訳出版に関する以下の叙述についての詳細は、Schulz を参照のこと。
- ¹⁹ Kierkegaard *Gesammelte Werke*.
- ²⁰ Kierkegaard *Sören Kierkegaard Die Tagebücher*.
- ²¹ Schulz pp. 388-393.
- ²² Schulz p. 331. なお、オーストリアの文芸誌『火口』(*Der Brenner*) に、1913年から21年にかけて、ケルケゴールのいくつかの作品のヘッカー (Theodor Haecker) によるドイツ語訳が掲載された。『序文』(の一部)、「ヨハネス・クリマクス」の「序言」、『想定された機会における三つの講話』の「埋葬の機に」、『四つの建徳的講話』の一部、「現代の批判」、1835年および36年に書かれた日記項目の一部などである。
- ²³ ウィトゲンシュタインの時代のケルケゴールの著作、日記、遺稿の英語訳の出版状況に関する詳細は、Swenson pp. 255-256を参照のこと。
- ²⁴ Kierkegaard *The Journals of Søren Kierkegaard*.
- ²⁵ 本章の内容は、クリーガンとシェンバオムスフェルド (Genia Schönbaumsfeld) の研究 (Creegan pp. 16-20 および Schönbaumsfeld pp. 13-36) を参考にしている。
- ²⁶ 注意点を三つ記しておく。まず、当然のことながら、以下に列挙する著作、日記、遺稿以外にも、実際にウィトゲンシュタインが読んだ (所有していた) ものが存在する可能性は残されている。それから、以下に列挙するものに関して、ウィトゲンシュタインがどの言語のどの版で読んだかまでは特定できていない。最後に、それぞれの根拠をどう解釈するかについては、言い換えれば以下に列挙する著作、日記、遺稿をウィトゲンシュタインが読んだ (所有していた) 蓋然性の高低については、本稿では判断を下さず、読者の判断に委ねることにしたい。
- ²⁷ Wittgenstein *Wittgenstein Familienbriefe* s. 48.
- ²⁸ ウィトゲンシュタイン「宗教的信念についての講義」255-256頁。
- ²⁹ Creegan p. 17.
- ³⁰ ケルケゴール『あれか、これか』第2部(下) 182-190頁。なお、本稿では、和書タイトルとなっている場合をのぞき、Kierkegaard の日本語表記を「ケルケゴール」に統一した。
- ³¹ Wittgenstein *Licht und Schatten*. 同書は、ウィトゲンシュタインの友人であったコーダー (Rudolf Koder) の遺稿から発見された紙片 (そこにウィトゲンシュタインは1922年に見た夢にまつわる体験を記している) と、同じく友人のヘンゼル (Ludwig Hänsel) の遺稿から発見された手紙 (1925年ころにウィトゲンシュタインが姉ヘルミーネに宛てて書いたもの) が収録されている。
- ³² Wittgenstein *Licht und Schatten* s. 18.
- ³³ Wuchterl und Hübner s. 96.
- ³⁴ モンク 216-222頁。
- ³⁵ Waismann p. 12.
- ³⁶ MS183, 238-9 (ウィトゲンシュタイン『哲学宗教日記』160頁) .
- ³⁷ MS132, 168 (ウィトゲンシュタイン『反哲学的断章』152頁) .
- ³⁸ 引用はケルケゴールの『非学問的あとがき』より (ケルケゴール『非学問的あとがき』192頁)。レッシング自身の言葉は、Lessing bd. 5, s. 100参照。
- ³⁹ Drury 'Conversations with Wittgenstein' p. 149.
- ⁴⁰ Drury 'Some Notes on Conversations with Wittgenstein' p. 102.

- ⁴¹ マルコム 102頁（一部改訳）。同書は Malcolm の邦訳である。
- ⁴² マルコム 1頁。
- ⁴³ Hänsel und Wittgenstein s. 56.
- ⁴⁴ ウィトゲンシュタインはルター訳聖書から「マタイによる福音書」11.6の一部を引用しており、鬼界訳の『哲学宗教日記』はそのルター訳（‘Seelig, wer sich nicht an mir ärgert.’）の邦訳である。[]内は新共同訳である。
- ⁴⁵ MS183, 213-4（ウィトゲンシュタイン『哲学宗教日記』144-145頁）。
- ⁴⁶ ウィトゲンシュタインがこの時期に『キリスト教の修練』を読んだことについてのより厳密な論証は、鈴木祐丞「ウィトゲンシュタインのケルケゴール体験」142-145頁参照。
- ⁴⁷ Wittgenstein *Public and Private Occasions* p. 404.
- ⁴⁸ SKS 20, 417. SKS はケルケゴールの『新版原典全集』（Kierkegaard *Søren Kierkegaards Skrifter*）の略記である。
- ⁴⁹ Sören Kierkegaard *Sören Kierkegaard Die Tagebücher*, Band 1, s. 392.
- ⁵⁰ Engelman p. 43.
- ⁵¹ 注22参照。
- ⁵² ここで補足すると、ケルケゴールが書き残したもののうち、ウィトゲンシュタインが読まなかった（所有していなかった）可能性のあるものとして、『愛のわざ』があげられる。ウィトゲンシュタインは1948年2月5日付でマルコムに送った手紙の中で「ケルケゴールの『愛のわざ』はまだ読んでいません。どうもケルケゴールは私には深遠すぎるのです。私よりも深い心の持ち主であればよい効果もたらされるのでしょうか、私の場合はただ当惑させられるばかりなのです」（Wittgenstein *Wittgenstein in Cambridge* p. 422）と述べている。
- ⁵³ 言うまでもなく、ウィトゲンシュタインがケルケゴールのことを念頭に置いて書いたり話したりした箇所は、これら以外にも存在すると考えられる。
- ⁵⁴ Wittgenstein *Licht und Schatten*, s. 18.
- ⁵⁵ MS183, 68（ウィトゲンシュタイン『哲学宗教日記』57頁）。
- ⁵⁶ MS183, 75（ウィトゲンシュタイン『哲学宗教日記』61頁）。
- ⁵⁷ MS183, 102-3（ウィトゲンシュタイン『哲学宗教日記』77頁）。
- ⁵⁸ MS183, 122（ウィトゲンシュタイン『哲学宗教日記』88頁）。
- ⁵⁹ MS183, 136（ウィトゲンシュタイン『哲学宗教日記』96頁）。
- ⁶⁰ MS183, 166（ウィトゲンシュタイン『哲学宗教日記』116頁）。
- ⁶¹ MS183, 176（ウィトゲンシュタイン『哲学宗教日記』123頁）。
- ⁶² MS183, 204（ウィトゲンシュタイン『哲学宗教日記』138頁）。斜字体は原文が暗号体で記されていたことを表している。
- ⁶³ MS183, 211（ウィトゲンシュタイン『哲学宗教日記』142頁）。
- ⁶⁴ MS119, 151（ウィトゲンシュタイン『反哲学的断章』96-97頁）。
- ⁶⁵ ここでウィトゲンシュタインがケルケゴールのどの著作等を念頭においているのかは不明である（Creegan p. 19参照）。
- ⁶⁶ MS122, 175（ウィトゲンシュタイン『反哲学的断章』110頁）。
- ⁶⁷ MS132, 167（ウィトゲンシュタイン『反哲学的断章』151-152頁）。
- ⁶⁸ Wittgenstein *Wittgenstein in Cambridge* p. 422.
- ⁶⁹ Hänsel.
- ⁷⁰ Hänsel s. 54.
- ⁷¹ Hänsel s. 96.
- ⁷² Wittgenstein *Wittgenstein in Cambridge*, p. 112.
- ⁷³ Waismann pp. 12-13.
- ⁷⁴ Lee p. 218.
- ⁷⁵ この会話が正確にいつなされたのかは不明であるが、マルコムがウィトゲンシュタインと初めて出会ったのは1938年秋のことである（マルコム1頁）。
- ⁷⁶ マルコム101-102頁（一部改訳）（Malcolm p. 71）。
- ⁷⁷ 以下の内容は、Drury ‘Some Notes on Conversations with Wittgenstein’ pp. 102-

104の要約である。

⁷⁸ キェルケゴールの主要な著作（『非学問的あとがき』など）の英語訳は、1940年代になされている（本稿第1章第3節参照）。

⁷⁹ Bouwsma p. 46.

参考文献

- ウィトゲンシュタイン、ルートヴィッヒ「宗教的信念についての講義」、『ウィトゲンシュタイン全集』第10巻、藤本隆志訳、大修館書店、1977年。
- 『反哲学的断章』、丘沢静也訳、青土社、1999年。
- 『ウィトゲンシュタイン哲学宗教日記』、イルゼ・ゾマヴィラ編、鬼界彰夫訳、講談社、2005年。
- キェルケゴール、セーレン『あれか、これか』第2部（下）（『キェルケゴール著作集』第4巻）、浅井真男・志波一富・新井靖一訳、白水社、1965年。
- 『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』（『キェルケゴール著作集』第7巻）、杉山好・小川圭治訳、白水社、1968年。
- 鈴木祐丞「キェルケゴールの新版原典全集（SKS）の特徴と意義について」、『名古屋商科大学論集』、第58巻第2号、2014年、167-174頁。
- 「ウィトゲンシュタインのキェルケゴール体験——『キリスト教の修練』の宗教哲学を生きること」、『宗教研究』、第88巻第3号、2014年、127-151頁。
- フォン・ライト、ゲオルク・ヘンリク「ウィトゲンシュタインの遺稿」、飯田隆編『ウィトゲンシュタイン読本』、飯田隆訳、法政大学出版社、1995年、335-374頁。
- マルコム、ノーマン『ウィトゲンシュタイン 天才哲学者の思い出』、板坂元訳、平凡社、1998年。
- モンク、レイ『ウィトゲンシュタイン』第一巻、岡田雅勝訳、みすず書房、1994年。
- Bouwsma, Oets K. *Wittgenstein, Conversations 1949-1951*, eds. J. L. Craft and Ronald E. Hustwit, Indianapolis: Hackett Publishing Company 1986.
- Conant, James 'Must we Show What we Cannot Say?', in *The Senses of Stanley Cavell*, eds. R. Fleming and M. Payne, Lewisburg: Bucknell University Press 1989, pp. 242-283.
- Creagan, Charles L. *Wittgenstein and Kierkegaard*, London and New York: Routledge 1989.
- Drury, M. O' C. 'Some Notes on Conversations with Wittgenstein,' in *Ludwig Wittgenstein: Personal Recollections*, ed. Rush Rhees, Totowa-New Jersey: Rowman and Littlefield 1981, pp. 91-111.
- 'Conversations with Wittgenstein,' in *Ludwig Wittgenstein: Personal Recollections*, ed. Rush Rhees, Totowa-New Jersey: Rowman and Littlefield 1981, pp. 112-189.
- Engelman, Paul *Letters from Ludwig Wittgenstein*, New York: Horizon Press 1968.
- Fremstedal, Roe 'Wittgenstein som religionsfilosof - og spesielt forholdet til Kierkegaard og kristendommen i Denkbewegungen,' *Norsk Filosofisk tidsskrift*, Nr. 03, 2006, s. 213-225.
- Hänsel, Ludwig *Begegnungen mit Wittgenstein—Ludwig Hänsels Tagebücher 1918/1919 und 1921/1922*, Hrsg. Ilse Somavilla, Innsbruck-Wien: Haymon Verlag 2012.
- Hänsel, Ludwig und Ludwig Wittgenstein *Ludwig Hänsel -Ludwig Wittgenstein. Eine Freundschaft*, Hrsg. I. Somavilla, A. Unterkircher und C. P. Berger, Innsbruck: Haymon 1994.
- Kierkegaard, Søren S. *Kierkegaards Bladartikler med Bilag samlede efter Forfatterens Død, udgivne som Supplement til hans øvrige Skrifter*, udg. ved Rasmus Nielsen, København: C. A. Reitzel 1857.
- *Af S. Kierkegaards Efterladte Papirer*,

- udg. af H. P. Barfod og H. Gottsched, bd. I-IX, København: C. A. Reitzels Forlag 1869-1881.
- *Samlede Værker*, bd. I-XIV, udg. af A. B. Drachmann, J. L. Heiberg og H. O. Lange, København: Gyldendalske Boghandels Forlag 1901-06.
- *Søren Kierkegaards Papirer*, bd. I-XI,3 udg. af P. A. Heiberg, V. Kuhr og E. Torsting, København: Gyldendalske Boghandel, Nordisk Forlag 1909-1948.
- *Samlede Værker*, bd. I-XV, 2. udg. ved A. B. Drachmann, J. L. Heiberg og H. O. Lange, bd. XV "Sag-og Forfatterregister" ved A. Ibsen og "Terminologisk Register" ved Jens Himmelstrup, København: Gyldendalske Boghandels Forlag, Nordisk Forlag 1920-36.
- *The Journals of Søren Kierkegaard*, ed. and trans. by Alexander Dru, London: Oxford University Press 1938.
- *Breve og Aktstykker vedrørende Søren Kierkegaard*, bd. 1 - 2, udg. af Niels Thulstrup, København: Munksgaard 1953-54.
- *Søren Kierkegaards Skrifter*, bd. 1-28, K1-28, udg. af Niels Jørgen Cappelørn, Joakim Garff, Anne Mette Hansen og Johnny Kondrup, København: Søren Kierkegaard Forskningscenteret og G. E. C. Gads Forlag 1997-2013.
- Kierkegaard, Søren *Gesammelte Werke*, bd. I-XII, übers. und hg. von H. Gottsched und C. Schrempf, Jena: Diederichs 1909-1922.
- *Søren Kierkegaard Die Tagebücher*, ausg. und übers von T. Haecker, Innsbruck: Brenner-Verlag 1923.
- Lee, H. D. P. 'Wittgenstein 1929-1931', in *Philosophy* Vol. 54, Issue 218, 1979, pp. 211-220.
- Lessing, Gotthold E. 'Eine Duplik,' i *Gotthold Ephraim Lessing's Sämmtliche Schriften*, Berlin: In der Vossischen Buchhandlung 1825.
- Malcolm, Norman *Ludwig Wittgenstein, A Memoir*, Oxford: Oxford University Press 1958
- Miles, Thomas 'Ludwig Wittgenstein: Kierkegaard's Influence on the Origin of Analytic Philosophy,' in *Kierkegaard Research : Sources, Reception and Resources*, Volume 11, Tome I, ed. Jon Stewart, Aldershot: Ashgate Publishing 2012, pp. 209-241.
- Rudd, Anthony, 'Kierkegaard, Wittgenstein, and the Wittgensteinian Tradition,' in *The Oxford Handbook of Kierkegaard*, eds. John Lippitt and George Pattison, Oxford: Oxford University Press 2013, pp. 484-503
- Schönbaumsfeld, Genia *A Confusion of the Spheres*, New York: Oxford University Press 2007.
- Schulz, Heiko, 'Germany and Austria: A Modest Head Start: The German Reception of Kierkegaard,' in *Kierkegaard Research: Sources, Reception and Resources*, vol. 8, Tome I, ed. Jon Stewart, Aldershot: Ashgate 2009, pp. 307-419.
- Suzuki, Yusuke 'Wittgenstein's Relations to Kierkegaard Reconsidered: Wittgenstein's Diaries 1930-1932, 1936-1937,' in *Kierkegaard Studies Yearbook 2011*, Berlin: Walter de Gruyter 2011, pp. 465-476.
- Swenson, David F. *Something about Kierkegaard*, Macon: Mercer University Press 1983.
- Waismann, Friedrich 'Notes on talks with Wittgenstein,' in *Philosophical Review*, Vol. 74, No. 1, 1965, pp. 12-16.
- Wittgenstein, Ludwig *Vermischte Bemerkungen*, Hrsg. Georg Henrik von Wright, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag 1977.
- *Culture and Value*, tr. by Peter Winch, Chicago: The University of Chicago Press 1980
- *Wittgenstein Familienbriefe*, ed. B. McGuinness, M. Ascher and O. Pfersmann,

Vienna: Hölder-Pichler-Tempsky 1996.

——— *Ludwig Wittgenstein: Denkbewegungen. Tagebücher 1930-1932, 1936-1937*, Hrsg. Ilse Somavilla, Innsbruck: Haymon Verlag 1997.

——— *Ludwig Wittgenstein: Public and Private Occasions*, eds. James C. Klagge and Alfred Nordmann, Maryland: Rowman & Littlefield 2003.

——— *Licht und Schatten*, ed. I. Somavilla, Innsbruck: Haymon 2004.

——— *Wittgenstein in Cambridge: Letters and Documents 1911-1951*, ed. Brian McGuinness, New Jersey: Wiley-Blackwell 2012.

Wuchterl, Kurt und Adolf Hübner, *Ludwig Wittgenstein*, Leipzig: Rowohlt 1979.